

女性学に対する男子学生の違和感

男子学生たちの不公平感

社会人に女性学(女性論)を講じる際には、緊張は伴うものの、共通の体験知に基づいた以心伝心の楽しさがある。それに比べれば、社会経験の少ない若い大学生に教えるのははるかに難しい。受講生の約半分を占める男子学生たちの中には、将来DV被害女性を支援する職に就きたいという明確な意識を持つ頼もしい者もあるが、彼らの全般的な傾向としては、女性学に関心であったり、不信の念を抱いている場合が少なくない。アカデミズムの中に制度化された女性学はもはや単なる必修単位の一つに過ぎなくなってしまっている。そのような学生たちを相手に女性学の真髄を伝えるのは至難の業である。触れられたくないプライベートな家庭の問題に直面したり、自らのこれまでの人生観・価値観が揺さぶられる授業は、そもそも語学を淡々と学習するのは性格が異なるという事情もある。

わたしが女性としての被害者意識を披露した際に彼らから返ってくるのは、逆に男性側の被害者意識や不公平感だったりする。近年その傾向が強まっていることを感じる。彼らいわく「レディース・デイの女性割引きや飲み放題・食べ放題、女性専用車両などがあって、むしろ女性の方が優遇されているのではないか。学校では女子は重いものを持たされずに済む」と。

また女性の社会進出によって男性の正規雇用が減ってきているという思い込みも強いようである。古久保さくらが指摘しているように、たとえば三浦展の著書『下流社会第2章』(光文社、2007年)の中で女性が男性の場を奪ったかのような説明がなされていることなどが、こうした誤解を生んでいるのかもしれない⁽¹⁾。

実際はその背景には、1990年代の半ばから経営側が意識的に追求した雇用の非正規化(日経連「新時代の『日本的経営』」1995年を参照)と、政府による労働の規制緩和があった。冷やかな見方をするならば、昔からある「女性の貧困」に男性の一部も「参入」するようになったに過ぎないのだが、その結果、終身雇用制と家族賃金制が崩壊して女性たちが働かざるを得なくなった。しかし全体的に見れば女性の方が男性に比べて非正規雇用の割合が圧倒的に多い。ビデオを交えながらこのような背景を説明すると、やっと学生たちも顔を上げて関心を示すようになる。

とは言え、フェミニズムや女性学、そして男女雇用機会均等法などが、所詮はそれまで性差別されてきた能力のある女性たちが男性社会に参入することを目指す、単なる能力主義に陥っているのではないかという疑念は払拭しきれないようにも思う。能力主義ではないオルタナティブな人間観や価値観を分かりやすく発信することはフェミニズム側が依然抱える課題である。

さらに、不安定雇用層の女性であっても最後には結婚という生活安定の逃げ道(場合によっては玉の輿路線)があるのに対して、同じような境遇の男性にはそのような選択肢がない、というのも彼らによく見られる感覚である。男性側のジェンダー役割の存在を彼らなりに理解していると言えよう。この不公平感をジェンダー役割への懐疑へと昇華させることができればよ

いのだが、事態はなかなか複雑である。古久保によれば、樋口美雄・太田清編『女性たちの平成不況』(日本経済新聞社、2004年)や小倉千加子著『結婚の条件』(朝日新聞社、2003年)の中で、安定雇用層の女性の方が現実的には結婚しがちであることが明らかにされており、不安定雇用層の女性たちにとって結婚という形での不安定雇用・貧困からの脱出ルートは現実には大きく開かれているわけではない、というのである⁽²⁾。ということは逆に言えば、婚活市場で常に非人間的な値踏みをされがちな男性側も、実際の結婚相手の選択にあたってはシビアな目を持っていることになる。

男子内の多様性

上述のような様々な誤解に対しては丁寧に解説していかねばならないだろう。だが女性学の授業で、「教育とジェンダー」や「隠れたカリキュラム」問題を扱う際に男子たちが抱く違和感は、先のような単なる誤解ではなく、「教育とジェンダー」研究が模索の途上にあることを示している。

土田陽子によれば、女性内分化研究に比べれば、男子はこれまで一枚岩として扱われ、その多様性に言及されることが少なかったという⁽³⁾。つまりこれまでは、学校で求められる学業やスポーツの達成と「女らしくしなさい」というメッセージがしばしば葛藤や矛盾を引き起こす女子に専ら焦点が当てられ、学業やスポーツの達成が「男らしさ」と矛盾することのないと考えられてきた男子については顧みられなかったのである。その結果、勉強もスポーツも不得意な男子たちは不可視化されてしまった。彼らは自己主張が苦手でおとなしく、いわゆる「男らしさ」の規範からはみ出ており、その自己評価(自尊心)は総じて低くなりがちであるという。

しかし考えてみればこのタイプの男子というのは決して少数派ではないだろう。このような男子を社会へ送り出す学校(高校)側の取り組みとして、保育士などの「女性職」と呼ばれる職業を視野に入れた進路指導や、自立性・積極性・規律化された身体を育むカリキュラムを通して「自立した男らしさ」を身に付けさせることを、土田は報告している。男らしさ女らしさにとらわれない個性を大切にしたいジェンダー平等教育の理念からすればいびつ感は否めないが、現場ならではのプラグマティックな苦渋の策と言えるであろう。一筋縄ではいかない「教育とジェンダー」研究の現況である。

[註]

- (1) 古久保さくら「ジェンダー変容期におけるジェンダー平等教育の課題」木村涼子・古久保さくら編『ジェンダーで考える教育の現在 フェミニズム教育学をめざして』解放出版社、2008年。
- (2) 同上。
- (3) 土田陽子「男の子の多様性を考える 周辺化されがちな男子生徒の存在に着目して」木村涼子・古久保さくら編、同上書。